



唯、私を待っておって下さった仏様が信じられたということだけが、私の生かされていく道だった。

『大石法夫先生直筆書信集』上巻二四六頁

又は樹心社刊『生まれてよかったですか』二四三頁

【法話の部】

心光寺住職

宮岳文隆みやおかぶんりゅう（釈文龍）

（二〇一二年五月十六日実施）

「帰依について」

■大石先生の御命日にお参りして

皆さん今日はようこそお参り下さいました。

五月と申しますと、大石先生のご命日です。先生は平成二十年（二〇〇八年）五月十三日にお亡くなりになりましたので、満四年が過ぎました。私は毎年ご命日には先生のご自宅にお参りさせていたかどうかと思っています。今年は早朝六時前に自宅を出まして、一般道を車で走って午後一時過ぎに広島のご自宅に着きました。大牟田市の村上不退さんご夫妻、岐阜市の田中謙次さん、広島市の竹内千里さん、三次市の水野ウタ子さんもちょうど見えていました。つくば市の嶋貫新次さんも午前中見えていたようですが、私が着いた時は帰られた後でした。先生のご長男の一朗さん御夫妻が音頭をとられて皆さんとご一緒にお勤めをしました。お勤めの途中、中津市の友松徹心さん、北海道の伊東正子さんが見えました。また江本薫さん（中津市長仁寺坊守）からお花とお手紙が届いていて、一朗さんがお手紙を読まれました。お手紙には、寺報「ラ

「ツシャイ・ラツシャイ」の編集、発行が楽しいということ、また御住職の江本忍さんが樹心社からの依頼で二冊目の本を書いておられることなどを書いておられました。江本さんは一冊目はブラジルに布教の旅に出かけた時のことを書いておられました。二冊目は大石先生に出会ってから今日までの歩みを書いておられるとのことでした。

青森県の桜井孝子さんからもお手紙が届いていました。先生へのご恩返しということで、北海道の林純市郎さんに声をかけて「念仏同朋研修会」を八月の終わり頃に開きたいという内容でした。

以上のようなお手紙を一朗さんが読まれた後、出席者が順番に近況報告をまじえた感話をしました。

■車窓の風景を見ながら感じた孤独

私は大分市組の推進員養成講座（後期教習）の教導として四月末から三日間本山の同朋会館で過ごしました。その時のことを話しました。二月からずっと多忙な生活が続いた後で、慌ただしくご本山に行ったわけですが、色んなことを感じました。私の子供の世代に当たる若い補導さんたちができてきぱきとやっておられて頭が下がる思いでした、教団も若い世代の方々へ移行しつつあることを感じました。私も六十歳を過ぎ、最近物忘れが多くなって自分の年齢を感じるようになりまし

た。そんな中で三日間を過ごしたわけです。そして帰りの新幹線の中で、車窓の風景を見ながら、何かしら孤独を感じていました。同朋会館でハードな三日間を過ごした直後で、ほっとしたということもあるのでしょうか。

その時に、この社会には孤独を抱えてひっそりと生きている人がどんなに多いだろうかなということをもふと思いました。本山での仕事を終えた後、大阪で一人暮らしをしている弟に久しぶりに会いました。弟も苦勞して、孤独の中で生きていく姿を見ました。また私と同一年の従兄で、行方知れずになつて久しい人がいます。子供の時一緒によく遊んだ仲です。今どこでどうしているだろうかなと思いました。車窓の景色を見ながら、そんなことをいろいろと思い出していました。

そういうふうな孤独な自分を感じる時に、私には大石先生の八十七年間の御生涯というものが、何か非常に近くに感じられるんですね。「信心をいただいてこのようになりました」と胸を張るのも大事でしょうけれど、逆にそんな自信も持たずに孤独を感じる。そういう時に私には、大石先生がより近くに感じられてくるんですね。

■獲得と所有のちがい

さて今日輪読した第十七信は「カトリック修練院にて」という題がついています。先生が若い頃、師の藤解先生とうげに随行

してカトリックの修練院に行かれたわけです。その時の藤解先生のご法話を元にして書いておられるのでそういう題がつけられているのです。けれどもこの第十七信には「帰依」という題が併せてつけられています、この題の方が第十七信で取り上げている内容をよく表していると思います。

さて大石先生は第十七信の冒頭に、有名な善導大師の六字積（南無阿弥陀仏の六字についての了解）の文を掲げておられます。

「南無」と言うは、即ち是れ帰命なり、またこれ発願回向の義なり。「阿弥陀仏」と言うは、即ちこれ、その行なり。

この義をもつてのゆえに、必ず往生を得、と。

（『真宗聖典』一七六頁）

またこれを受けて、これも有名な蓮如上人の「信心獲得章」と呼ばれている『御文』の文を取り上げておられます。

信心獲得すというは、第十八の願をこころうるなり。

この願をこころうるというは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり。このゆえに、南無と帰命する一念の処に、発願回向のこころあるべし。これすなわち弥陀如来の凡夫に回向しますところなり。

（『真宗聖典』八三四頁）

大石先生は、藤解先生がカトリック修練院でお話しされた法話の内容を元にしながら、この二つの文によって、帰依ということについて話してくださいさつているわけです。

始めに、『御文』に出てくる「信心獲得」という言葉の「獲得」ということについて、少し押さえておきたいと思います。獲得という言葉は、現代語では獲得と読むのですが、この獲得という言葉と似た言葉に所有という言葉があります。通常この二つの言葉はほぼ同じような意味に使われていると思います。が、実はこの両者には本質的な違いがあるのです。

所有という言葉は、土地や金など見えるものであれ、知識や情報など見えないものであれ、私にとっては本質的に「外なるもの」、私とは本来的に何らの関係を持たないものを所持している場合に使います。仏教の言葉に「我・我所」という言葉があります。「我」とは、他の一切と区別した私というものを立てるわけです。そしてその立てた私を護り拡大していく為に、必ず「私のもの（我所）」を次々と所有していこうとします。これが「我」と「我所」との関係です。この「我・我所」というあり方を言い表すのにふさわしい言葉が所有という言葉です。

ところが私（我）は、財産、知識、情報、名声、地位、学歴など様々なものを一生懸命に所有していくのですが、そうして所有したもの（我所）の一切を、命終わる時には全て置いて

いかなければなりません。お金をどんなに沢山持っていて、死んでいく時に持って行くわけにはいきませんね。名声も地位も学歴も知識、教養も持って行くわけにはいきませんね。ということは、そういうものは全て自分には元々何の関係もない外物だったということです。

ところが獲得の場合は、正に私自身に属するものを得た場合に使う言葉です。ということは獲得したものは正に私自身ですから、私どもは命終わっていく時に、正にそこに帰っていく。獲得したものは、置いていこうとしても置いていくことは出来ないのです。

信心とはそのような自己自身を得ることをいうのです。ですから、「信心を所有する」というような言い方は決してしません。信心とは所有するものではなくて、獲得するものなのです。もつと言えば私どもが本当に獲得出来るものは信心のみだと言ってもよいのです。それ以外の一切は、元々自分とは何らの関係を持たないものなので、所有はできても、獲得することは決してできないのです。

そういうわけで、親鸞聖人は信心のことを「涅槃（煩惱や生死の迷い、苦しみから解放された智慧と慈悲の世界。仏道の最終目標）の真因」と言っておられます。信心こそが涅槃の真の因だと。つまり信心があったら涅槃のお浄土に行けるといようなことではないのです。お浄土行きのキップのようなもので

はない。そうではなくて信心がもう涅槃の因なのです。信心が涅槃をもたらしていく。信心がやがて「報土（浄土）の真身を得生す」（『真宗聖典』一九〇頁）と、そういう言い方を親鸞聖人はなさっています。

それに対して、「我・我所」は妄念妄想に過ぎません。こういうものを一生の間どれだけ所有しても、「我」も「我所」も、全部が儚く消えていきます。けれども獲得した信心は、それが私自身ですから、命終わるとき正にそこに帰っていく。信心が涅槃の身、浄土の真身となっていく。そういう意味で所有するということが獲得することとは本質的に違うのです。

私どもが人間に生れてきて、一生の内でも本当に得ることが出来るもの、またそれを得なければ人間に生まれてきたことが空しく終わってしまうもの、そういうものが信心です。ですから信心獲得という言葉は、本当に自分自身になることを課題にしている言葉なのです。信心獲得こそが私どもが人間に生まれて為すべき一大事の仕事です。蓮如上人が『御文』の中で言っておられる信心獲得という言葉は、そういう大事なことを私どもに呼びかける言葉なのです。

■法蔵菩薩の発願の追体験

続いて蓮如上人は、「信心獲得すというは、第十八の願を

心得るなり」と、こうおっしゃっています。「心得る」という言葉は、「心得」といって現代語でも使いますね。けれども現代語で使う心得とは、お茶の心得があるとか、経済の心得があれば株取引がうまくやれるとか、そういうふうには知識や技能を習得する意味に使われています。それは先程の「所有」と変わりません。しかし今ここで「第十八の願を心得るなり」と言われているのは、所有ではなくて獲得、つまり自分自身を得るという意味で言われているのです。すなわち第十八願を自分自身としていただくということです。「これが私自身だったのか!」、こういうふうな領きをもって、法蔵菩薩が建てた第十八の本願を、私自身としていただくという意味です。

続いて「この願をこころうるといふは、南無阿弥陀仏のすがたをこころうるなり」とおっしゃっています。「南無阿弥陀仏のすがたをこころうる」、これは蓮如上人の独特な言い方です。南無阿弥陀仏にはすがたがあるというわけです。そのすがたを「こころうる」と。ここにも「心得」という言葉を使っておられます。つまり「南無阿弥陀仏のすがたを自分自身としていただく」ということですね。でも「南無阿弥陀仏のすがた」とは、一体どのようなすがたなのか。そのことについてはまた後で触れたいと思います。

続いて「このゆえに、南無と帰命する一念の処に、発願回向のこころあるべし」と。これは「私の上に南無と帰命する一

念のこころが起こった。そこに法蔵菩薩が五劫の昔に私の中で発願して立ち上がられた、そのお心が今私の上に生き生きと再現される」と、このような意味になるかと思えます。そしてそのことを、「これすなわち弥陀如来の凡夫に回向しますますこころなり」と言われているわけです。つまり、私の上に南無と帰命する一念のこころが起こったことは、法蔵菩薩が五劫の昔に私の中で発願して立ち上がられた、その仏願の生起の出来事を、今私の上に追体験することなのです。

■ 回向について

ところで回向とはどういうことなのでしょう。大事な言葉なので、このことについてもちよつと触れておきたいと思えます。真宗では如来回向という言葉があつて、回向とは阿弥陀さんが我々に阿弥陀さんの世界のものを与えてくださることだというように言い方がよくなされます。しかし、それはともすればまず私があつて、その私が阿弥陀さんから何かを貰うというようなことをイメージしがちです。でも回向とはそんな実体的なことを言うのではないのです。それは先ほど言った「所有」に当たります。曾我先生は「回向とは表現である」とおっしゃっています。表現という言葉は通常は、形には表れない内面的なものを何か形で表すことを言いますが、この場合の表現とは、それとは少し違って、隠れていたもの

が「表に現れる」という意味ではないかと思えます。つまり私どもの深い根源に流れていた本願が、私を破って、私の上ですぐにたを現わしてくるということ。そのことを回向えこうというのでしょうか。従ってそれを私の上から言いなすと、「生まれ変わる」とか「新生」、「誕生」、或いは「呼び起される」というような意味を持った言葉になると思えます。

以上をまとめて言うと、「私の上に南無と帰命する一念のところが起こるとき、そこに法蔵菩薩が五劫の昔に願を起して立ち上がった事実を、今私の上に経験する。その南無の一念こそは、阿弥陀仏が私を破って、私の上に現れたお心にほかならない」と。先ほどの『御文』おふみの内容は、大体そのような意味になるのではないかと思えます。

■南無の内容（一）―末松さん宛の大石先生の手紙より―

ところで先ほど出てきた「南無阿弥陀仏のすがた」についてですが、「南無阿弥陀仏のすがた」とは「南無のすがた」です。南無が要です。そしてその「南無」とは、先程述べたように、阿弥陀仏、すなわち法蔵菩薩が私の上に現れたすがたに外ならないということです。

その南無の内容ですけれども、前回取り上げた第十六信と深いつながりがあるんですね。前回大石先生が末松匡憲さんに差し上げたお手紙を使わせていただきました。その中で大

事なことはどこかという、大石先生はこんなことをおっしゃっていました。

私は匡憲さんに会うとき、いつも念仏してお会いしてるのです、お念仏がなかったら私は匡憲さんの顔を見たら逃げ出しますよ、私はそういう心が浮かぶのです、匡憲さんと同じ心です、すぐに人を疑うのです、そして暗きより暗きに落ちて、世に生きて行く事ができないのです。私がお念仏を申そうと思う心が出るのは、その様な私の心が見えた時です。

（平成十四年七月三日付末松匡憲さん宛大石法夫先生の手紙）
ここが非常に大事な所です。念仏を申そうという心、つまり南無の心がどういう時に起きるのかということを、先生はここに書いておられます。それは自分の心が見えたときだと。どういう自分の心かという、「すぐに人を疑うのです、そして暗きより暗きに落ちて、世に生きて行く事ができない」、そういう心が見えた時に念仏申そうと思う心が出るということですね。

それからもう一つ『在家仏教』誌に先生がお書きになったものを前回使わせてもらいましたが、その中にも先生は、ここで念仏が出るかということを書いておられます。

じやけんきょうまん あくしゅじょう

私は今もって「邪見憍慢の悪衆生」です。悲喜愛憎の心は瞬時もやみません。楽しいと思うときがあれば、ありがたいと思うこともあります。だが、その意識は、ややもすると瞬時にして執着となり、不安になります。私は何十年もそれを繰り返してきました。今もその心は、根強く動き続けます。

でもそんな心の動きが「教え」の光に照らし出されると、お念仏が自ずから出てくださいます。だからこそ、新天地へ新天地へと、往生の歩みを続けさせていただいているのです。

『在家仏教』平成十四年八月号六頁)

要するに執着心ですね、瞬時にして執着の心が起こり、その執着の心によって不安になる。それを何十年も繰り返してきた。沢山の同行さんが先生のお話を聞きに集まって来られるようになった今も、なおその心は根強く動き続けます。もう卒業したということじゃないんですね。「でもそんな心の動きが教えの光に照らし出されると、自ずからお念仏が出てくださいます」と。「だからこそ、新天地へ新天地へと往生の歩みを続けさせていただいているのです」と書いておられます。ここが非常に大事なところだと思いますね。

先生はよく「念仏は生きている」とおっしゃっていました。そうすると私どもは、どうしても先生がそうおっしゃるところ

の光の面だけを追って行くのですね。けれども先生ご自身は、新天地へ新天地へと往生の歩みを続けさせていただいている原動力は、そういうどうにもならない煩惱の心なのだと言っておられるのです。執着の心、不安な心、それをずうっと繰り返してきて、今もその心は根強く動き続ける。そういう自分のすがたが見えた時、お念仏が出てくると。それが「念仏が生きている」ということなのです。

■南無の内容(二)——古田さん宛の大石先生の手紙より——

それからもう一つ前回の資料として取り上げたのが古田隆子さんへ宛てて書かれた先生のお手紙です。これも再度要点のみを読まさせていただきます。

どれほどあがいても、心の状態をどうにもできない。一起一滅する心が私の自由にならない。それが自分なのだ。一分前の心、一分後の心が自由にならないのみでなく、現在の今の心が自由にならない。これが自己なのです。煩惱具足の凡夫で、自分が自分をもてあます。いやな心であっても、それが真正正銘の私なのです。それを知らせて下さったのが、平素申し上げております仏様のご本願(教え)のおかげであります。その時ご本願の摂取のみ手の中にあつたのです。そう思っておること自体が救いだったのです。

私は常にそのご本願の音声に励まされ、生かされております。『正信偈』の中に「本願名号正定業」と聖人様のお言葉です。このご本願のお呼びかけによって私は生かされております。お念仏なしでは生きてゆけない自分です。その他のことは何も知らなくてもよい。このこと一つが私が生かされている力の源泉なのです。

(平成十一年二月七日付古田隆子さん宛大石法夫先生の手紙)

ここにもものすごく大事なことが書いてありますね。「お念仏なくしては生きて行けない自分、その他のことは何も知らなくともよい。このこと一つが私が生かされている力の源泉なのです」と書いておられます。皆さんが光として仰がれた大石先生の要は、実はここなんです。私どもはどうも先生の要を別な所に見てしまいがちです。どうしても光の面ばかりを追いがちになる。しかし先生自身は、「お念仏なくしては生きてゆけない自分です。その他のことは何も知らなくてよい」と書いておられます。もういろんな事を知らなくてもよいということです。「このこと一つが私が生かされてる力の源泉なのです」と。

これが南無の内容なのです。「どれほどあがいても、心の状態をどうにもできない」、「煩惱具足の凡夫で、自分が自分をもてあます。いやな心であっても、それが真正銘の私なのです」と。そういう心が全部南無の内容になってくる。それ

を外したら南無もないわけです。

■南無の内容(三)——「超えてしまつたらお終いよ」——

やはり前回も出てきたんですけれども、本願力ということについて、親鸞聖人は『教行信証』の中に、『浄土論註』の中から次の文を引用しておられます。

他力ほんがんにきと言うは、如来の本願力なり。『論』(『論註』)に曰く、「本願力」と言うは、大菩薩、法身ほつしんの中にして常に三昧にましまして、種種じんずうの身・種種の神通・種種の説法を現じたまうことを示す。みな本願力ほんがんにきより起こるをもつてなり。

(真宗大谷派発行『真宗聖典』一九三頁)

ここで大菩薩とありますが、前回もお話ししましたが、仏道修行には五十二の段階があるのですが、その最終段階に至る一歩手前において、十段階の菩薩の位があります。ところが七地までの菩薩と八地以上の菩薩とは大きな次元の違いがあるとされています。それで八地以上の菩薩を、それ以前の菩薩と区別して大菩薩と呼んでいます。なぜ七地と八地の間にはそのような大きな断絶があるかというと、七地の菩薩には「七地沈空の難」と呼ばれる大難関があつて、自らの力ではどうしても超えることができない大きな落込みに陥つてしまふと言われています。八地以上の菩薩はその落ち込みを超

えることができたら大菩薩と呼ばれるのです。そしてその大菩薩とは、他力すなわち如来の本願力を自らの主体として生きる菩薩のことだと曇鸞大師は言われます。

こういうことを聞きますと、私どもとしては七地沈空しちじちんくうを超えるという点にどうしても目が注がれるわけです。私どもは勿論七地の菩薩というわけではありませんが、日常生活には様々な落込みが待ち構えています。そんな時それを何とかして超えたいと思うわけです。人に向つても、「このように超えました」と言つて胸を張りたいわけです。私どもにとつて落込んだ状態しちじちんくうというのはマイナスでしかないからです。仏道修行において七地沈空しちじちんくうの難は、決定的なマイナスの状況として位置づけられてきた歴史があるのです。

しかし先生の書信やお手紙などによつてはつきりしてくることは、実は「超えた」ということが大事ではないということとです。むしろ七地沈空しちじちんくうの渦中にあるということ、これが大石先生においては最も大切な原点、原動力だということとです。これを外してしまつたら本願力には出会えない。南無のころが現れてこないということとです。

さつき読んだお手紙に一貫して流れている声は、「七地沈空しちじちんくうを超えてしまつたら、もうお終しまいよ。超えてしまつた時はもう死んだということよ」——この声です。超えたらお終しまいで、渦中が命なんです。七地沈空しちじちんくうの渦中——そこにこそ本願力が働

くんです。我を呼ぶ本願の声が聞こえてくる。なぜなら、そういう身を「われら」と呼んでいるのが弥陀の本願だからです。

ですから大石先生は、恒にこの沈空ちんくうの渦中という所に立つておられるのです。

お念仏なくして生きてはゆけない自分です。その他のことは何も知らなくてよい。このこと一つが私が生かされている力の源泉なのです。

お念仏なくして生きていけない自分とは、沈空ちんくうの渦中にある自分ということとです。沈空ちんくうの渦中にあるから、そのわが身を呼ぶ本願の声が聞こえてくる。沈空ちんくうの渦中にあるわが身ということとは、一つの大きな目覚めなのです。大石先生の命はここだと思えますね。

■南無阿弥陀仏のすがたと法蔵魂の胎動

南無の内容というものは、そういうふうちんくうに沈空の渦中にある自分自身の姿を照らし出されることとです。それは自分自身の迷いの深さ、闇の深さを照らし出されることとです。自分自身の迷いの深さ、闇の深さは底がない。そのことに目が覚める。頭が下がる。そしてそういう身を呼び続けておる本願の声を

聞く。感じる。それがすなわち南無です。

大体この私は、自分自身の迷いの深さを知らないんですね。何とかすれば何とかなると思う心が抜け切れません。それでいろいろな方法を駆使して、何とかその迷いを克服しようと思います。宗教も念仏もそのための教えとして求めることが多いです。しかしそれはよく考えてみれば、そのような企てをしている自分よりも、迷いの方が小さいということになりますね。自分の力で迷いをコントロールしようとしているのですから。

しかしそれはちようど、夜空の星を屋根に登って竹竿ではたき落そうと試みているようなものなのです。もしそんなことをしている人を見たら、その愚かさを笑わない人はいないでしょう。けれども私どもは自分の迷いに対してこれと同じことをしていて、その愚かさには気付かずにいるのです。

先ほど述べた「目が覚める」「頭がさがる」というのは、その愚かさに気づかされたことをいうのです。夜空の星の広大さには限りがない。それを前にしては、我々は自分の小ささを投げ出して、その広大さを仰ぐばかりです。われらの生死の迷いの深さ、底のなさも、夜空の広大さ、限りなさと同じです。その生死の迷いは、私が起そうと思つて起こってきたものではありません。その出所は私をはるかに超えていて、「曠劫来流転」の歴史を持ち、「一切群生海」の広がりを持

っています。そのことに目が覚めたら、私どもはそれを何とかして克服しようとしていた愚かさを知らされ、それに頭が下がり、それをいただくほかはありません。それがすなわち南無です。

弥陀の本願といつても、そういう一切群生海の生死の海の深さに頭が下がり、そういう身に見出された魂のことです。その魂を『無量寿経』は法蔵菩薩の物語として説いているのです。ですから法蔵菩薩の物語は、われらの生死の海の底に流れる深い魂に目が開かれた、その感動の表現とも言えます。

その魂はどういう魂かというところ、それを『無量寿経』では、

群生を荷負してこれを重担と為す。

（『真宗聖典』六頁）

という声であらわしています。すなわち底のない生死の海に浮き沈みしている一切群生の身を、我として担い、どこまでも責任を負うていくことを決意する声です。或いは

たとい、身をもろもろの苦毒の中に止るとも、
我が行、精進にして 忍びて終に悔いじ。

（『真宗聖典』十三頁）

（たとえ私の身が諸々の苦しみの中に止まってそこ

から終ついでに出ることができないとしても、私わたしの修行しゆぎようはどこまでも精進し続け、その苦しみを担い続けて、最後まで悔いることは決してありません

【*「苦毒」は原文では「阿鼻地獄(無間地獄)」となっている】

という法蔵菩薩の誓いの声であらわしています。すなわち苦惱する一切群生いっさいくんじやうの身と一つになって、決してそこから逃げずにその身を担い続けることを誓った声です。

これが法蔵菩薩の魂です。蓮如上人のおっしゃった「南無阿弥陀仏のすがた」、すなわち南無のすがたとは、このような法蔵魂ほつざうこんの声を言っておられるのだと思います。われらの深広無涯底じんこうむがいていの苦悩に頭が下がって、そういう私どもの身を「あなた」と呼びかけ、深く受け止め、手を合わせ、待ち、迎えてくださる魂の声です。

そういう法蔵魂の声が、今までの私を破って、私の中から胎動たいどうしてくる。そのことを蓮如上人は、「南無阿弥陀仏のすがたを心得る」、南無と帰命する一念の処ところに、発願ほつがん回向えこうのころあるべし」と言っておられるのだと思います。

■ 帰依が恒に出発点

この「南無と帰命する一念」ということについては、今日輪読した書信の中で、カトリック修道院における藤解とうげ先生の

法話の最初に次のような言葉がありました。

私はこの信心の道において一番大切なことは私の方の仏教の言葉から申しましたら、帰依ということであると信じております。

それが信心の道を進ませて頂く我々の心の決定であります。そしてその帰依が出发点で最後まで無限に、仏に我々は教えられ、又導かれしつつ、信心の道は完成してゆくものであると、かように申し上げたいのであります。

『大石法夫先生直筆書信集』上巻一七九頁・又は樹心社刊『生まれてよかったですか』一七〇頁)

こういうふうとうげに藤解先生は、帰依が出发点であることを最初に話しておられます。そして「その帰依が出发点で最後まで無限に、仏に我々は教えられ、又導かれしつつ、信心の道は完成してゆくものである」と続けておられます。そうすると帰依を出发点としていつか完成のときがあるというようにも読めるのですが、そうではありません。次の頁では、

之が私の、この世から死んだ先の未来までもこの心に救われて、永遠に生きてゆく、こういうことにならせて貰っておるのであります。

(同、一八一頁)

と話しておられます。「この心」とは、出発点であるところの帰依です。帰依が出発点で、その出発点に救われて「永遠にいきでゆく」と。ですから到達点はない。完成の時はない。恒に帰依という出発点に立ち返り続けていくということなのです。

■「浄土でかならずまっています」とは

このことは曾我量深先生からもつねに教えていただいている大事なところですよ。『歎異抄聴記』の中で曾我先生は次のようにおっしゃっています。

私共がお浄土に往生したら衆生と仏との位がなくなるかという南無阿弥陀仏に於て厳然として存在する。真実報土に往生しても仏と衆生との位は南無阿弥陀仏に於て厳然としてみだれぬ。だから何時までも何時までも一念帰命が永遠に消えぬ。娑婆六十年のみではなく永遠に一念帰命、生きていようが死んでいようが永遠に一念帰命である。浄土へ行くまでは帰命はあるが浄土へ行ったら帰命がなくなったのではない。南無帰命は永遠に消滅しない。南無に於て衆生がある。我々は常に南無といふところにゐるのである。

(『曾我量深選集』第六卷二六七頁～二六八頁)

「南無に於て衆生がある。我々は常に南無といふところにゐる」と。これは本当に凄い言葉ですね。無量寿とはこういうことを言うのだなと思います。

無量寿とは量を超えている、量的な世界とは全く次元を異にしているということです。ですから時間がどこまでも際限なく続いていくことを無量寿のように思うかもしれませんが、それは無量寿ではありません。それは正に量寿です。量的な時間の延長に過ぎないからです。しかし「南無に於て衆生がある」、そこに感じる我。これは通常の時間を破っています。時計の時間を超えています。これが無量寿です。それは言い換えれば、今を失っている私に、今が与えられると言ってもよいでしょう。

私どもが生きている時間というのは、過去・現在・未来という流れ去る時間の中を生きています。過去は過ぎ去ってしまった、未来は未だ来ない、あるのは今だけだと言います。けれどもその今も、あつという間に過ぎていく点にしか過ぎません。今を失っているのです。そういう流れ去る物理的な時間の中を我々は生きています。そういう時間は蓮如上人が、「人間はただ電光朝露でんこうちやうろうの、ゆめまぼろしのあいだのたのしみぞかし」(『真宗聖典』七七頁)とおっしゃったような空過する時間です。そしてその時間はいつか必ず終わる。終わったら一体何処に行くのだろうか、そんなことを思っている時

間です。

ところが親鸞聖人はそういう物理的な時計の時間世界の中心を生きておられたではありません。

この身はいまはとしきわまりてそうらえば、さだめてさきだちて往生しそうらわんずれば、浄土にてかならずかならずまちまいらせそうろうべし。

〔真宗聖典〕六〇七頁

これは高齢になられた親鸞聖人が、関東の同行に宛てて書き送られたお手紙の一節です。一見すると、死んだら浄土で待っていますよと言っておられるように聞こえます。けれどもある先生（池田勇諦師）が話しておられるのですが、真宗高田派の川瀬和敬師が次のようなことを書いておられるそうです。

いま、ここにないことを流転の時間の後ほどにかくかくのことが起こってくる、というような言い方を祖聖はなさらないのでしょうか。

（真宗大谷派教学研究所発行「ともしび」第五八三号七頁）

これはとても重要なご指摘ですね。こういう言葉に接すると、私などは気軽に「必ず」という言葉を使っているなとつくづく思います。高柳正裕先生が言っておられるのですが、私ど

もが「必ず」と強調する場合は、本当は「必ず」ということが言えないから、期待をこめて「必ず」と力んで言っているだけです。「必ず明日行きますよ」とか言うでしょう。本当は明日自分が生きていくかどうかさえ分からないのに、でも親鸞聖人が「必ず」と言われる場合は、たとえ死んでも「必ず」なんです。お手紙に書かれているのは、そういう意味の「かならずかならず」なんです。

では親鸞聖人はまだ死んでいないのに、なぜそういうことを確信をもって言うことができたのか。それは南無の世界を帰り場所とされ、恒にそこに生きておられたからなのです。曾我先生がおっしゃっていますように、「生きていようが死んでいようが」もうそこから外れることはない。そのことがはっきりしているからです。

その南無の世界は、過去・現在・未来という流れ去る時間を破っています。つねに南無という「今」を生きていく。それは、呼びかけがつねに「今」だからです。そういう世界において「浄土にてかならずかならずまちまいらせそうろうべし」と言っておられるのです。浄土は場所ではないということです。私どもの上に開かれた南無の世界、一念帰命の世界、それが浄土なのです。

■永遠の帰り場所としての南無の一念

先ほどもお話ししましたように、その南無のころは、私が発す心ではなく、法蔵菩薩がわれらの深広無涯底の苦悩に頭が下がり、そういう私どもの身を深く受け止め、手を合わせ、待ち、迎えてくださっている魂のことです。その南無の一念、これが私どもの帰る場所ですし、一切の人々の永遠の帰り場所です。お浄土に行ったら南無を卒業して、仏様になつて救う身になると、そんなことはありません。浄土に行こうがどこに行こうが、そこが私どもの恒の帰り場所ですね。これしかないわけです。

そしてそれが先ほどお話しした渦中と離れないのです。七地沈空の渦中。これを一点でも外して、超えた者になった途端に、南無の世界はぼやけていきます。つまりそういう身を呼ぶ声が聞こえなくなっていくのです。大石先生はしばしば「私の人生はつねに岐路に立っています」とおっしゃっていました。それは七地沈空の渦中に帰るか、つまり迷いの身に帰るか、それとも超えた者になってしまうかという、その岐路です。自分が超えた者になれば、南無する必要はない。もう自分でちゃんとやっていけるわけですから。そういう者になるのか、それとも沈空の渦中を忘れないのか。恒にその岐路に立っていると大石先生は言われました。

南無には卒業がないということですが、つねに緊張感が伴わないと、私はどうしても得た者になってしまうので、と

もすれば迷いの渦中にある自分を忘れてしまいます。ですから恒に岐路です。しかも、そこが一番新しく、死のうが生きていようが、恒にその岐路に生きて行くわけです。この一点ですね。この岐路を契機として、南無のころ、念仏もうさんとおもいたつころが発つてくる。そういう迷いの身を「あなた」と呼ぶ本願の声を聞く。感じる。その南無の世界こそが、永遠に現在と言えるものなのです。

大石先生は第十七信において、「帰依」ということを主題に取り上げて、そのような大事なことを我々に教えてくださっておられるのですね。

■人に現れた南無阿弥陀仏のすがた

最後に、「南無阿弥陀仏のすがた」ということについて、以前「心光寺便り」（平成十五年十月一日発行）に載せた文章を資料としてお配りしています。先ほど「南無阿弥陀仏のすがた」とは法蔵菩薩のすがたのことだと申しましたが、そのすがたは具体的に人の上にかたちを取って現れてくるということとをそこに書いています。時間がありませんので詳しくは取り上げられませんが、少しだけ触れて終わりにしたいと思います。「心光寺便り」には次のように書いています。

大石先生は八月に続いてお彼岸の法座でも、業について

のお話をしてくださいました。その中で深く心に残っているのは、大石先生のお母さんについてのお話でした。それはこういうお話です。

「業を背負うて生きていく。目の前で母がそれを見せてくれましたよ。九十何歳の母が中学生の孫に向かって合掌して、『真雄^{まさお}ちゃん、長い間お世話になりました。このご恩は死んでもよう返しませぬ。こらえてください』言うて、畳に手をついて額を畳につける。驚いてね。母が世話するから孫が慕うてくるのでしよう。その世話をしとる孫に向かって、『長い間お世話になりました。このご恩はよう返しませぬ。死ぬまで。こらえてください』と。私はどういふ心境からあれが出るんだろうかと思うてね。このことを私は何度も話します」

例えばこういうすがたが、具体的に人に現れた南無阿弥陀仏のすがたではないのかなと思います。私どもの迷いの身に、法蔵菩薩の方が頭を下げて「申し訳ない、済まなかつた」と言つてね、私どもと一つになって私どもを呼び続ける。こういうすがた。それが南無阿弥陀仏のすがたです。そしてそれが呼び声となつてお母さんの心の中に聞こえてくる。そうするとそのすがたが、それを聞いているお母さんの上にも現れてくるということです。

つまり南無阿弥陀仏のすがたとは、久遠劫来^{くおんごうらい}迷い続けてき

た私の身を呼び続けておる私自身の深い呼び声のことです。その声を『無量寿経』は法蔵菩薩の物語で表しているのです。大石先生のお母さんはそういう法蔵菩薩の声をわが身に聞いていかれた。そのお母さんの上に、その法蔵菩薩のすがたが



現れていたと、こういうことではないのかなと思います。

では時間もきましたのでこれで終わります。(法話の部終り)

【座談の部】

■自分に光が当たる

(宮岳) Sさんは感話で「自分は自分を正当化し護っている、卑怯な奴だと」おっしゃいましたね。非常に大

事な言葉だと感じました。

(S・M女) 結局は自分が問題なのに人の問題ばかり言うてきました。

(宮岳) そこですね、一番大事なところは。そこに光が当たるということは大事なことだと思います。

(S・M女) でも今日聞いておって、聞くのが恐くなった。自我を抑えてしまわないといけないのかと思われて

…。

(宮岳) 違いますね、抑えてしまうのではなくて、「本当に自我だった」ということですね。Sさんが感話で言われていたように、「自我だった」「自我だ」ということですね。抑えるというけども、実際は抑えてはいないでしょう。そのことの発見です。今日感話で言われたように、「本当に自分は自我だなあ。自分を固めていて卑怯な奴だ」と。そこが南無のポイント

です。

「自分は間違っていない、正しい」と、そう言っていることが自分を固くして苦しめていく。そのことにごかで少しひびが入る一点は、「自分はそうやって自分を護っているんだな」と。そこに光が行くことだと思います。そうすると大分違ってくると思います。大石先生が南無と言われる所はそういう所だと思えますし、私が言おうとしたのもそこなんですけど。

渦中と言ったのはそういうことです。今言ったようなことです。だから先ほどのSさんの感話の言葉を、私は光の言葉としてね、聞きました。

逆に言うと「自分は間違っていない、正しい、超えた」というのは、自分が見えてないからそう言うわけですね。

(S・M女) 超えたなんて言っていないですが…。

(宮岳) Sさんがそう言ったと言っているということではないのですが…。でもSさんもやはり超えたいでしょう。超えて上に立ちたいでしょう。やはり名声とか褒められたいとか、そういうものを求めていく。そういう自分の姿が見えるということだと思います。

(S・M女) でも私は自分の持っている能力を生かしたいと思う。その能力が脳死移植みたいに、他人のものにされ

て、自分は愚かな者にされる。そんな感じがして、それだけではどうも…。身につけたものを全部捨ててしまわんといけないのかと…。

(宮岳) いえ、そういうことを言っているのではないのです。能力を生かしたいというのは当然のこと、それを否定しているわけではありません。自分の姿が見えるという事です。

ただ、能力を生かしたいという場合でも、そこにはいろいろな心が混じっている。名声を得たいとか、人から素晴らしと言われたいか。やはり私もは人に認めてもらわないと立つ瀬がないですね。だけど本当に出遇った人は誰からも認められなくても満足できるんですね。

(S.M女) 仏法で助かるということも危うくなってきているから、本当に大変です。困っている人を助けるようなことが出来たら、人間を生きてきた甲斐があると思うのですが、肝心の自分が助かっていない。

(宮岳) そうですね。大石先生はよく「あなたが助かりなさい」と言っておられました。

(S.M女) 私は古い生き方が身にしみこんだ祖母に育てられて、私をそのような人間に育て上げようとしていることを嫌というほど感じてきたので、もう古い世界はこ

りぎりという感じですが。それがあから、「与えられた場所で生きる」とかいうことに承服できないものを感じる。承服できないことを無理に力づくで抑えつけられるような世界があるとしたら、それは間違いではないかと思うんですが。あまりいろいろな目に遭ってきたから、仏法といたってそういうものではなかない気がして、仏法を聞いていくこと自体が恐ろしくなる。

(宮岳) 気持ちはよくわかりますが、それが仏法ということではない。

(A.Y) どうしても我があって、我を大事にする方向で考え行動しているものですから、なかなかわからないですよ。

(宮岳) それを改めようということではないんです。「それで苦しんでいるからそれを改めないといけない」というような道徳的な話ではない。そのような我を大事にする自分だと深く領ければ解放されるんですね。

大石先生もそれが改まったとは言っていないでしょう。末松さんに宛てたお手紙の中で先生は、「私はそういう心が浮かぶのです、匡憲さんと同じ心です。すぐ人を疑うのです。そして暗きより暗きに落ちて、世に生きてゆくことができないのです。私がお念仏を申そうと

思う心がでるのは、そのような私の心が見えた時です」とはつきり書いておられます。ですからそのような心が見えるということが、先生にとっては大きな喜びなのですよ。不思議ですけどね。それが先生においては一貫しているでしょう。そういう自分自身の我を知らされるということが、先生においての力の源泉なんです。「改めましょう」という道徳的な話をしているわけではいんですね。

(A・Y) 先ほどのお話で言うと、獲得の世界でなくして所有の世界にいつの間にか心は夢中になってしまっている。

(宮岳) そのことが本当に見えるということが大事で、見えるということが先生においては喜びの瞬間ですね。それが南無。この辺りは本当に分かりにくいところですが。

(S・M女) やはり自分に問題がある、自分のせいだと気づくと、楽ですね。

(宮岳) そうでしょう。Sさんは先ほど自分は卑怯だと言われましたが、私はその感話に光を感じました。私も本当にそう(卑怯)なんですよ。

(S・M女) 私は自分をずうっと見てきたから、自分が見えるんですよ。

(宮岳) それなら、そこが大事だと思います。それがいつの

間にか人の役に立って認められたというふうになっていくと、自分の値打ちが評価されず不当に扱われているという不満が出てくる。

(S・M女) でもそんな自分では生きている甲斐がない。

(宮岳) そういうふうになると、ずれてくる。

(S・M女) 周りの人たちも、認められるように動いていますよね。

(宮岳) 周りですか。そこがずれてくる所ですね。先ほど感話で言われた感覚、そこを大事にしていくことが大切だと思いますね。その言葉に「おやつ」と光を感じました。周りを持ち出すと際限なくずれてきますね。だから最初の原点を大事にすればいいと思うんです。だってそれが親鸞聖人が教えて下さる念仏の一番大事な所であり、要ですから。

悪人正機と言いますが、これは自分は悪人だと自覚するということを言っているのではない。自分を悪人と自覚しているのは法蔵菩薩だけです。私どもは自分を悪人とは絶対思っていない。自分は善人で、悪いのは他だと、これが外れんですよ。そういう自分を知らされるわけです。それが光が当たるといことですね。ああ自分は善人だと。他を悪人にしてる善人だなあと。これが南無ですね。また、これが悪人正機というときの悪人の内容

なので。

(M S) Sさん、さつき愚か者にされると言われたけど、愚かっているのはどうということ？

(S M女) 自分は愚かとは思うけど、だからといって知識や知的な面を全部否定されて生きるような人間にされそうで、それだけは我慢ができないということです。

私は学生時代に文学作品の多読にあけくれました。文学によって精神的な成長を目指してきた。そういうふうな文学が私を育ててくれたし、それが仏法を聞くことにもつながった。それでそういうふうにならぬうちに、短歌をみてる先生から厳しく批判され、削られてしまふ。そのことは自分の大事な成長の過程を否定されるようで辛い。その外にもそういう縁が私には色々押し寄せてくるんです。そんな状態の中で、愚か、愚かと言われると、知的な面を誰かにやってしまつて、私には下半身だけが残されると、そういうふうな思えてくるんですよ。誰だってこれだけは生かしたいと思うものがあるじゃないですか。それを仏法で何もかも愚かと言われると、それはちよつと…。

(M S) これだけは生かしたいとは何ですか？

(S M女) 知性の部分は否定されたくない。今までそういう

ふうになんか読んできた経験からしてもね。だけどそれを否定されるんです。それは私にとっては辛い。私の人生における大きな財産だから。

(M S) 私は、「これだけは」と、そういうものが自分にもあるつもりでおつたが、気がついたら全然何もなくて、そのことに本当に驚いた。本山に行つた時廊下の掲示板に安田先生の言葉で、「自分もすてたものじゃないと思つてるのが、凡夫」という言葉が書いてありました。「ありやー」と思いました。

(S M女) 私もそういうふうになんかと思ふことはあるよ。でも私が言っていることは、そういうこととは違うよ。うな気がする。

【途中省略】

■ 俱会一処くえいっしょということ

(S M男) 日めぐりカレンダーに「浄土にてかならずかならずまちまいらせそうろう」とありましたが、親鸞聖人のお言葉ですか？

(宮岳) そうです

(A Y) 「俱会一処くえいっしょ」と同じですか。

(宮岳) いえ、ちよつと違うんです。親鸞聖人がおっしゃつ

た「浄土にてかならずかならずまちまいらせそうろうべし」というのを、私どもが思っているような「俱会一処」の意味で受け取ると、それは違ふんです。

(S・M男) えつ、そうなんですか。墓石などに、よく「俱会一処」と書かれてありますが、違ふんですか。

(宮岳) 「俱会一処」と言っても、私どもが普通思っているのは、「死んで浄土に往ったら必ず会おうよ」というような意味に受け取っているでしょう。それは違ふということですよ。だって親鸞聖人がこれを書かれたのは、まだ亡くなっていない時でしょう。死んでないのに、「死んだら浄土で会いましょう」と親鸞聖人が言われるでしょう。普通我々はそういうことを気軽に口にしていきますが、親鸞聖人がそういうことを軽々しく口にされるとは思われません。

何か死んでから往く世界のことを想定して、死んだらそこで一緒に会おうんだと、そんなことではない。「俱会一処」というなら、そういう手紙を書かれているその今、「俱会一処」の世界におられるのです。これから死んでそこに往くという話ではない。

南無の一念のところにおいては、過去・現在・未来を超えている。親鸞聖人の在世当時、釈尊や七高僧はるか昔に亡くなられています。正信偈を執筆中の親鸞聖

人にとっては、過去の人ではない。南無の一念において、現在の人なのです。また親鸞聖人は七百五十年後の我々を知らない。にもかかわらず知っておられるとも言える。知っておられるという意味は、過去の人、現在の人、未来の人が、親鸞聖人においては全て俱会（俱に会う）なのです。それ以外の在りようはあり得ない。つまりこれから往く世界ではないのです。恒にそこに居るといふことです。

だから南無の一念というものは、親鸞聖人においては、これくらい確かなことではないわけです。恒に南無の一念において生かされていく。今も南無の一念だし、死んでも南無の一念を外れるわけでないんです。

(A・Y) 父や母のところへ自分も往く、皆も往くという意味で、墓石には「俱会一処」と書かれているのだと思つていました。

(宮岳) 「俱会一処」の言葉が、あの世で会いましょうというような受け止められ方になってしまっている。そうではないのです。

(A・Y) 信心獲得の世界へ行こうというわけですか。

(宮岳) そうです。我々は過去・現在・未来という時計の時間を生きているでしょう。過去があつて、今があつて、未来があるという。でもこの今というのは、ほんの点

にしか過ぎないでしょう。たちまち過去になっていく。こういうふうにはただ流れていく時計の時間を流転の時間というのです。こういう時間の中で未来で会いましょうと言っている、本当はそんなこと当てにならないでしょう。

親鸞聖人はそういう過去・現在・未来という時間を破った世界で言っている。どこで破られたかというところ、南無です。南無の一念は、過去、現在、未来と流れ去る時間を破っている。南無の一念もなく、いつか死んだら仏さんの世界に往くとかいうのは根拠がないのです。最近ではお葬式の時でも、「天国で会いましょう」などと言うでしょう。あれと同じです。

(S・M女) 天国でなくて浄土でしょう。

(宮岳) ええそうですが、言葉で浄土と言っている、天国で会いましょう」と言うのとあんまり変わらない。確証が何もなくて言っている。

(S・M女) 仏さんの世界に往くと私は思っているのですが、(宮岳) ええそうなんです、もしも南無の一念のないところで「死んだら仏さんの世界で会いましょう」と言っているとしたら、それははっきりした根拠があつて言っているわけではない。期待で言っているだけです。

親鸞聖人は南無の一念のところ立って言っている

から、期待ではない。確証の世界を言っている。南無の一念のところは過去・現在・未来が納まっているからです。南無の一念をいただくということは、そこに過去の七高僧も生きています。それから未来の友も居ります。

(S・M男) 聞法仲間の〇〇さんがよく、「今だ今聞かんにゃ」と言っていた。

(宮岳) ええ、その今は、あつという間に消え去る今ではない。その今は流れないんです。恒に「聞思して遅慮することなかれ」(『真宗聖典』一五〇頁)という呼びかけに立ち返る今です。恒に南無の一念です。そこに釈尊も居られれば、七高僧も居られれば、ご先祖も居られる。また私も居れば、子孫も居る。南無の一念において、それこそ「俱会一処」です。

(S・M男) それで大石先生は自分の墓は作らなくてもいいよ。南無阿彌陀仏と念仏もうすところに、いつでも私は居るよと言われたのですか。

(宮岳) そうです。南無阿彌陀仏が自分の墓だと。南無阿彌陀仏において先生は今も生きておられるわけです。親鸞聖人も生きておられるわけでしょう。我々が親鸞聖人や大石先生の書物をいただくというのは、死んだ人として見ているわけではないでしょう。

(M・S) S (男)さんの亡くなられた奥さんもそうですね。

(宮岳) そうです、南無の一念において出会えるわけです。過去の人ではない。

(A・Y) 禅の世界でも臨済などが同じようなことを言っていますね。

(宮岳) 禅のことはよくわかりませんが……。ともかく死んでからあの世で会いましょうというのは、流転の時間、砂時計の中で言っているわけです。ある時あぶくができていつの間にか消えていく。そういう空しい時間の一生を、蓮如上人は「それ、人間の浮生ふしゆうなる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、この世の始中しちゆう終じゆう、まぼろしのごとくなる一期いちごなり」『真宗聖典』八四二頁)と言っておられるわけです。でも南無の一念は流転しない。

(Y・H) そういうことは今まで考えたことはなかったけど、言われてみるとそうですね。

(宮岳) ええそうですね。今日の書信にもあったでしょう。「帰依が出发点で最後まで無限に、仏に我々は教えられ、又導かれしつつ、信心の道は完成してゆくものであると、かように申し上げたいのであります」
こういう藤解とうげ先生の言葉がありましたね。

また曾我先生の次のような言葉もご紹介しました。

「何時までも何時までも一念帰命が永遠に消えぬ。娑婆六十年のみではなく永遠に一念帰命、生きていようが死んでいようが永遠に一念帰命である。浄土へ往くまでは帰命はあるが浄土へ行ったら帰命がなくなったのではない。南無帰命は永遠に消滅しない。南無に於て衆生がある。我々は常に南無というところにゐるのである」と、こういう言葉です。

南無の一念に呼び返されることによって、念々に新しく生き続けていくということです。

(S・M男) 私が仏法を聞くようになったのは、妻が死んでからです。早く死んだことを恨んでいたが、それがきっかけとなって、このような仏法の世界に早く縁を結ばせてくれたというふうに見れば、あんまり恨んではいけないーと思います。(一同笑)

(宮岳) それはねえー、そういう面は確かにあります。

(Y・H) 亡くなって何年になるの？

(S・M男) ちょうど三十二年。

(一同) ええーっ、すごいなあー。

(S・M男) 娘に、俺が死んだ時は、棺桶にビニールのバットを入れておいてくれと言っていた時もある。

(Y・H) どうして？

(S・M男) 向こうで殴りたいから。(一同笑)

でももう今はそんなことは思わない。逆に感謝ですね。

【以下省略】

(座談の部終わり)

※以上は二〇一二年五月十六日に開催した「心光寺定例聞法会」の記録を加筆訂正したものです。尚、記録起しをして下さいました安藤康彦様に深くご感謝申し上げます。